

2018年度 日本語教育実習前期レポート

私は今期の日本語実習を通して、日本語を学習者に教えることの楽しさを初めて感じることができました。しかしながら、その一方で、自分の実習準備や教案づくりの甘さを見つけることもできました。

まず初めに授業ビデオや先生のアドバイスを通して反省点と改善点を分析していきます。初回の授業では、私は自分の口癖の壁にぶつかりました。ウィンチェスターの学生が私にとって、身近な存在だったということもあり、授業で英語を使って日本語を説明してしまったり、自分自身の言葉に日本語と英語を混合させてしまったりしてしまいました。ビデオから見つけた部分では、授業で学生から質問されて考えているとき、どうやって説明しようかと悩んでいるとき、沈黙の時間を作ってしまったとき、私は、「Ehhhh.」「Like...」「Ahhhh..」のように英会話で使うような言語を使ってしまっていました。日本語の授業という意識が十分になかったことも一つの原因だと思います。心がけて、「えっと...」「なにかな...?」「うーん。」のように日本人が使う自然な日本語を使うようにすると、学習者の話し言葉にも変化が見られました。例えば、私が「どんな食べ物が好きですか?」と聞くと、「うーん。えっと・・・ラーメンと・・・カレーライスです。」というように日本人が使う日本語に近づけるように学習者の話し方が変わってきました。口癖は先生のアドバイスやビデオの視聴を通して見つけることができました。

口癖のみならず、さらには、発音やイントネーションにも気を付けなければいけません。言語学習者は教師の発音やよく口にする言葉を真似します。間違った使い方や間違った発音をしていると、学習者がそのままの形で覚えてしまう可能性があります。授業の中で自分が発言する一つ一つの言葉に責任を持つよう改善していく必要があると感じました。特にロールプレイやリピート練習の時、学習者の反応を気にしていたため、間違った発音やイントネーションで話してしまうという場面が多くみられました。自分の話している日本語に注意する余裕がありませんでした。実習準備時に、発音やイントネーションにも注意することが大切だということがわかりました。

次に、私は授業中、自分の身の回り（机の上の荷物や教材の配置）が整頓されていないこと、黒板をどう使っていくかの計画性のなさに気づきました。いくらたくさん教材を準備していてもきちんと整理して、それらを並べていなかったため、計画通りに教材を使えないことがよくありました。学習者の集中力を切らしてしまうこともあったと思います。教壇に上がってみるまで、教材の並べ方や黒板の使い方では苦戦するとは予想がつきませんでした。ビデオの視聴や反省会を通して、黒板の使い方は改善することができました。しかし、机上での教材の配置決め、整理整頓が私にとっては難しく、うまく改善することができていませ

んでした。最後の授業でさえ、テーブルの上を授業の合間であさっている姿が見えました。教員が授業の時間を教材探しで削ってしまうのは、学習者の集中力を妨害してしまうだけでなく、授業の流れを自ら切ってしまう可能性があるので、早く改善策を見つけようと思い深く反省しました。

また、教材づくりの中での反省点を上げていきます。教材の文字の大きさや教材の使い方も苦戦してしまいました。文字の大きさが小さく、学習者が板書を書き留めるまでに時間がかかったり、ローマ字記入を忘れてしまっていたり、誤字があったりと、文字カードを作る場面でさえ、ミスが多くみられました。だんだん授業に慣れていくにあたり、適正な文字の大きさ選びに慣れていきましたが、とても難しかったです。

実習が始まって間もないころは、余裕がなく、教科書や参考書に従い授業をしていく授業形態でしたが、慣れていくにつれ、自分なりのアレンジを加えることができるようになりました。具体的には、初めて私が余裕をもって臨めた授業で、「朝昼夜」の説明をするとき、横溝先生から私たちが一年生の時に見せていただいた「太陽の絵」を使って言葉を導入していくという方法を使用することができました。この授業を通して私の中で、教材作成において自信を持てる部分が出てきて、教科書にそり、その中で自分なりのアレンジを加えるコツが掴めてきました。「太陽の絵」を導入し、「朝昼夜」という言葉だけでなく、「食べる」という動詞を習った回では、「朝ごはん、昼ごはん、夜ごはん」という言葉を教える場面でも成功することができました。自分のアイディアで作った教材がうまく使えた時や、学習者の興味をひくことのできた教材を使えた時、とても嬉しかったです。

最後に、前期の実習授業では、実習準備の時点で苦戦してしまったり、教案通りに進めることでさえ難しかったりと、苦勞もたくさんありましたが、苦しさと同じ分だけやりがいを感じることができました。学習者と一緒に授業を楽しむことが出来ました。授業は指導者一人の努力だけでは築くことが出来ないのだと改めて実感しました。指導者である私たち四人の中のコミュニケーションと連携も大事にしないと、授業が成り立ちません。後期の実習では、指導者同士のコミュニケーションをもっと大事にしていきたいです。

日本語を教えるということは、まだまだ私にとっては難しいことです。しかし、学習者が自分が教えた言葉を習得してくれたり、必死になって覚えようと話してみようと努力したりしている姿を見ることができるだけで、頑張っただけでよかったと感ずることができました。準備期間の辛さをも忘れることが出来るほどのやりがいをも感ずることが出来ました。後期の授業では、さらなる辛くて悔しい経験を積むことになるかもしれませんが、前期で味わうことのできた「教えることの楽しさ」と「教えることのやりがい」を忘れずに臨んでいきたいと思っています。